

フィールド風

(現場)からの風

宮田守男

今日は2月最初の午の日の初午。711年2月最初の午の日に、京都伏見の稻荷山に農耕の神様が降りたといわれることから、この日

を「初午」といい、稲荷神社を参拝する「稲荷詣で」の風習が広まり、江戸時代には五穀豊穡に加え、商売や家内安全の神様として農村以外にも広まった日でもある。

キツネの好物である油揚げに、酢飯を詰めて奉納したことが始まりと言われる初午の食べ物「稻荷寿司」。今でも食文化として定着している。東日本は米俵を模した俵型、西日本はキツネの耳を模した三角形で稲荷寿司を見れば出身が解ると言われている。今日の食卓に乗る稲荷寿司の形を案

しむのも面白いのかも
しれない。

外国から訪れる皆さんの雪を楽しみ姿がテレビから伝わってくる。私たちの生活の中で雪と遊ぼうとする感情が年を重ねる度に少なくなってきたような

雪国ならではの楽しむ文化が求められている

気がする。「雪」という字の「ヨ」の部分を作家の幸田露伴は「手」と言い「雨は手でうけることはできぬが、手でうけることができるのが雪だ」として舞い降りる雪を受け止めて、その清らかな感覚

が手に残ることを楽しんでたと言われている。学生時代に先生からは「ヨ」の部分は、スキの穂で作ったぼうきのごとで、雪はぼうきのように「万物を掃き清める」との教えだったが「雪」の持つ意味

はさまざま。大古幸子さん訳のドイツ北方の昔話「雪の色が白いのは」では、どうしても色が欲しい雪は、お墓にその黒色をくれないかと言って追ひ払われる。今度はスマイル・バラと鮮やか

な色に頼むが、笑われて相手にされない。全ての花に断れた揚げ句、白い花をつけるマツユキノウにすがりつく。

自分は色を持たない風のようなものだと嘆いた。かわいそうに思ったマツユキノウは自分の白い色をやり、雪はやっと白くなる。雪はそれ以降、冬に花々を凍死させる。でもマツユキノウだけは、かれんな小花が咲くように助けた。雪は白いものだと思わず、雪がなぜ白いのか想いを馳せてしまう。万物に存在する色が、どんな物語



週末の国道、積雪の少ないためか渋滞の時間は限られている

を抱いているのかも地域資源の再発見になるに違いない。
「サラッと二句・わたしの川柳コンクール」で「また値上げ節約生活 もう首上

まう日々だ。
(信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上)